ダイバーシティサッカー

2018年度
ダイバーシティサッカー活動報告書

関西大会で 10 年ぶりの再会

はじめに

お〜、生きてたか！

10 年ほど前、ホームレスサッカーチーム「野武士ジャパン」の選手としてともに活動をしていたメンバーが、2018 年 5 月に開かれた「第 1 回ダイバーシティ[※1]カップ in 関西」で再会を果たしました。10 年の内に新しい仕事に就いた人や、一度はアパートに入居したものの再びホームレス状態となり『ビッグイシュー日本版[※2]』の販売をしている人もいて、一人ひとりの置かれた状況は異なります。会って一言目に彼らは「お互い生きていて良かったね。今日は敵（対戦相手）だけど仲良くやろう」と言葉を交わしていました。

日本でのホームレスサッカーの活動は 2008 年に始まりました。10 年あると良いことばかりではなく、体調を崩す人や高齢で亡くなる人がいるのも現実です。ただ生きて再会できたことを喜び合える相手がいることは、彼らが住居や仕事を得るのと同様に、とても尊いことだと感じました。

2015 年からはホームレスの人だけでなく、ひきこもり経験者、うつ病、依存症の当事者など様々な背景をもつ人が交流する“ダイバーシティサッカー”へと活動の幅が広がっていきました。そこでも「得点できて嬉しかった」といった感想と同じくらい、「家の一歩外に出るのが怖かったけど、サッカーで友だちができて嬉しい」「ダイバーシティカップで久しぶりに会えて、元気な顔が見られて良かった」といった声が寄せられています。

このように、「生きていてよかったね」「彼や彼女は今どこで何をしているのかな」と自分ではない誰かへ想いを馳せる場が社会の中にもっとあっても良いのではないでしょうか。

この 1 年、サッカーをきっかけに多くの出会いが生まれました。もしかすると今後、一緒にサッカーをする仲間、これからの人生をともに歩む友人との出会いになっているのかもしれません。この報告書では“ダイバーシティサッカー”の活動に参加した人の声や活動内容についてお伝えします。皆さまにとっても、この報告書が素敵な出会いのきっかけになれば嬉しいです。

NPO 法人ビッグイシュー基金
ダイバーシティサッカーコーディネーター
長谷川知広

※ 1 ダイバーシティとは「多様性」のこと。
※ 2『ビッグイシュー日本版』とは、有限会社ビッグイシュー日本が発行する雑誌。
ホームレスの人に雑誌販売という仕事の機会を提供し、自立を応援する事業。

ナイスパス！

はじまるよ～

NAGATOMO

01 01

あの3番やるな～

16

はじめに 3

参加した人の数だけ物語がある 6

・路上生活を経験。50 歳を過ぎサッカーを続ける理由　花渕信さん
・トゥレット症候群の僕がスポーツをする理由　菊地涼太さん
・双極性障害の私がダイバーシティカップを卒業する理由　一之瀬徳之さん

スポーツ交流サロン 9

・～東京編～ 社会や人とつながる
・～大阪編～ 多様な社会的背景をもつ当事者が自ら学び、関わり合う

ダイバーシティカップ 15

・ダイバーシティカップ 5 (東京)
・第 1 回ダイバーシティカップ in 関西
・人と人をつなぐ「社会性スポーツ」の新たな試み
～第 1 回ダイバーシティカップ in 関西レポート～

事後交流会 ～関係性を深めるために～ 22

ダイバーシティサッカーのノウハウを伝える勉強会 23

・「勝利至上主義でないスポーツ」の可能性
～サッカー（スポーツ）大会運営勉強会レポート～
・みんなが楽しめる場をつくるために
～社会的困難を抱える人々へのスポーツコーチング勉強会レポート～

ダイバーシティサッカー協会活動一覧 28

おわりに 30

※本報告書では、「サッカー」と「フットサル」の 2 つの表記で“フットボール活動”を紹介しています。

参加した人の数だけ物語がある

この 1 年間で延べ 1000 人以上がダイバーシティサッカーの活動に参加しました。参加者はホームレスやひきこもり経験者、うつ病、依存症の当事者など様々な背景をもつ人です。活動に関わっている一人ひとりが感じたこともまた様々。3 人の参加者にダイバーシティサッカーへよせる想いを聞きました。

ストーリー1

路上生活を経験。50歳を過ぎサッカーを続ける理由

花渕信さん

花渕さんは宮城県出身の 55 歳。ホームレス状態を経験しビッグイシュー誌の販売をしていました。2016 年に病気をきっかけに福祉制度を利用しアパートへ入居。しかし、アパートに入ったことで路上にいた時の友人やビッグイシュー誌の読者と会うことも減り、孤独感がひどく、うつ病になってしまっていたと当時のことを振り返ります。医師から気分転換に身体を動かすことを勧められてホームレスサッカーチーム「野武士ジャパン」の練習に参加するようになり、この 2 年ほど練習に参加しています。

ダイバーシティサッカーに参加して良かったことを聞くと「プレーではあんまり活躍できないから点を決めることじゃないな（笑）。それよりも、『よう！元気かっ！なんかあったら言えよ！』って言い合える仲間がいることが大きいんじゃないかな」と笑顔で語ってくれました。

ストーリー2

トゥレット症候群の僕がスポーツをする理由

菊地涼太さん

障害などに悩み２年ほどひきこもっていた菊地さん。ふとしたきっかけからホームレス当事者やボランティアによるサッカーチーム「野武士ジャパンと愉快な仲間たち」の一員に。チームとの出会いやそこで得た経験を語ってくれました。

病気がきっかけでひきこもりに

僕は「トゥレット症候群」という緊張すると勝手に声が出てしまったり、体を動かしてしまう障害があります。辛いのは汚言症という症状で、公的な場で意図せずに「お尻」「おっぱい」といった卑猥な言葉や他人を罵るような言葉を発してしまうことです。

中学生の頃に発症し、高校を卒業してから２年間ぐらいひきこもっていました。発症するまでは、人と話す事や新しいことにチャレンジすることが好きだったんですが…。突然声が出てしまい、人から馬鹿にされたり笑われたりするのが辛くて、どんどん人と関わらなくなり、家にひきこもるようになっていきました。

「野武士ジャパンと愉快な仲間たち」の一員に

親友がある時、家にひきこもっている僕の事を心配して「気分転換に山へ行こう」と誘ってくれたんです。その山頂でたまたまビッグイシュー基金のスタッフと知り合って、「野武士ジャパンの練習に来てみない？」と誘ってもらいました。それが３年前のことです。

最初は緊張して汚言症が出てしまって、周りの人たちも「なんだ！変な奴が来たぞ」と思ったかもしれないですが、良い意味で野武士ジャパンのメンバーは個性的な人ばかりで、自分だけが目立たず、温かい雰囲気で迎えてくれて居心地が良かったんです。それから練習に参加するようになり、ダイバーシティカップにも「野武士ジャパンと愉快な仲間たち」のメンバーとして参加しています。

自分の障害を隠さず生きていきたい

練習や大会に参加する中で、ホームレスやひきこもり状態だった人が、自分の事を隠さずにみんなの前で語っていて、「強い人だな」と思いました。今は自分の障害を隠すのではなく、新しいことにもチャレンジしたいと思っています。変な言葉を言ってしまって人にばかにされるのではという怖さもありますが、みんなのように自分自身を隠さず生きていけたらと思います。こう思えたのもダイバーシティカップとの出会いのおかげなので、次はトゥレット症候群のメンバーでチームをつくり、ダイバーシティカップに参加したいです。

ストーリー3

双極性障害の私が ダイバーシティカップを卒業する理由

一之瀬徳之さん

ダイバーシティカップに過去３度出場した一之瀬さん。「ダイバーシティカップを卒業する」という連絡があり、その真意を教えてもらいました。

うつ病などの精神疾患を経験した仲間とフットサル

私は双極性障害※の当事者で、20 年間この症状と向き合っています。以前は、病気が原因で人に会う事に抵抗を感じたり、調子の波があり転職を繰り返していました。2012 年に精神障害者向けの再発予防や復職支援プログラムを提供する施設に通いました。そこで、自分の心身と付き合う方法を学び、今は再就職し約 6 年間継続勤務しています。

メンタルの病気からの回復には運動が効果的とされ、施設の利用者でフットサルチーム「オムハビユナイテッド」をつくり、プレーや運営をしています。精神障害のことはなかなか親や友だち、会社には相談ができないので、気兼ねなく集まれるフットサルチームは私や仲間にとって大切な場所ですね。

※ 双極性障害とは、躁状態または軽躁状態とうつ状態とを反復する精神疾患で、気分障害の一つ。

ダイバーシティカップを卒業

2015 年に「精神障害者フットサルオープンリーグ」という大会に参加しました。スポーツをみんなでやることで、チームの垣根を越えてお互いをリスペクトしあえることが魅力だと感じました。ダイバーシティカップでは「精神障害」という枠にとらわれず様々な人たちと出会え、今では大会で知り合ったチームと合同練習やミニ大会を開いています。そういった意味で、自分たちはダイバーシティカップで良いご縁をいただけたので、ここから先は卒業し、他のチームに席を譲るのが良いだろうと思っています。多くの人がダイバーシティカップやフットサルを通じて元気になれたら素敵ですよね。

スポーツ交流サロン

「スポーツ交流サロン※」（月２回開催）は、ホームレスやひきこもりなど社会から特に孤立しがちな人が、立場や背景にとらわれずスポーツを通じて楽しいひと時を過ごす交流の場です。

社会から孤立している人にとって「相談の場」はあっても、楽しく体を動かしたり、相談者という立場を越えて人と関われる場は決して多くありません。

月に２回行く場所がある、会える相手がいるということは精神的な安定につながり日常を変えるきっかけになります。

2017 年に東京で始まった「スポーツ交流サロン」は今までに 40 回開催し、2018 年には関西でも開かれるようになりました。

※サロンとは社交（交流）する場のこと。

社会や人とつながる ～スポーツ交流サロン東京編～

東京のスポーツ交流サロンは、“ホーム”である新宿の公園と“アウェイ”であるフットサル場で、毎月２回開催しました。社会から孤立していた人が、スポーツ交流サロンを楽しみに平日を過ごしたり、サッカーが上手くなるよう普段の生活に運動を取り入れたりしています。

10歳も70歳も一緒にプレー

2018年度は333名が参加（全18回）。参加者はホームレスやひきこもり、依存症、精神障害のある人など様々です。年齢は10代～70代（赤ちゃんやお子さんを連れて参加する人もいるため、見学を含めると0歳～70歳）。

ホームレスも子どもも、ごちゃまぜの草サッカー

公園では、隣のスペースでボールを蹴っていた親子や外国人のグループにも「一緒にボールを蹴りませんか」とお誘いしました。普段、ホームレス状態の人と子どもとの接点はなく、会話をすることはほとんどありません。しかし、スポーツ交流サロンでは「サッカー」を切り口に多様な出会いが生まれました。

コートへ行くことも小さなチャレンジ

“アウェイ”であるフットサル場へは１時間ほどかけて電車で移動します。電車に乗るのが苦手な人、障害が理由で知らない場所に足を運ぶのが難しい人にとっては、行くまでの道のりも小さなチャレンジです。電車の中では「最近元気にしていた?」「実は仕事に就いて２年経ったんだ」「おめでとう!」など参加者同士の会話もはずみました。

緊張や対人恐怖をほぐすプログラム

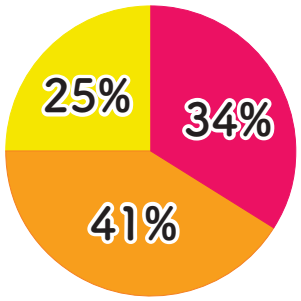
スポーツ交流サロンの参加者は年齢や背景も様々で、体調が優れない人や対人関係に恐怖を持つ人もいます。そのため、すぐにサッカーのプレーを開始するのではなく、心身をほぐすためのアイスブレイク※を行います。例えば、アイスブレイクではコーチが「小さい頃の夢!」「最近チャレンジしていること!」などのお題を出し、自分と共通する仲間を探します。また、２人でペアを組んで行う鬼ごっこなど「遊び」の要素も取り入れました。

参加者の心と身体が温まってきたら、5、6人でチームを組み、今日の目標やチャレンジしたいことを共有します。試合形式のゲームでは緊張もほぐれ「ナイスプレー!」「失敗を恐れずチャレンジ!」といった声が自然と沸き上がります。ゲーム後には、みんなでご飯を食べながら「今日の感想」や「日常生活のこと」「今チャレンジしていること」などを語り合いました。

※ アイスブレイクとは、初対面の人同士が出会う時、その緊張をときほぐすための手法。参加者の不安や緊張を氷にたとえ、その「硬い氷をこわす、溶かす」という意味を持っています。

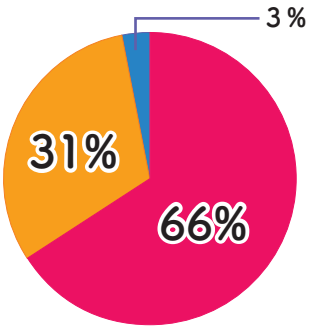
数字で見るスポーツ交流サロン

参加者の年代



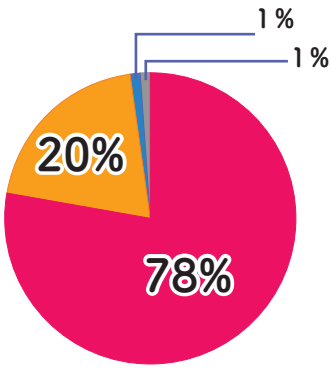
■10～20代
■30～40代
■50～70代

新しい出会いや社会資源を知ることができたか？



■とてもそう思う
■そう思う
■そう思わない
■全くそう思わない

また参加したいか



■とてもそう思う
■そう思う
■そう思わない
■全くそう思わない

●参加者へのアンケートより
参加延べ人数　333人
回答者数　109人

参加者の声

人と話すのが苦手な自分でも自然と話ができ、自信につながっています
徳裕太さん（20代男性）

自分は人と話すのが苦手で…。今は就労移行施設に通い、仕事に就くことを目標に頑張っています。2017年にその施設スタッフとはじめてスポーツ交流サロンに参加しました。初めは知らない人も多く緊張したのですが、体を動かすのが楽しく、気が付けばたくさんの人と話をしていました。場の雰囲気が良いからか安心して参加でき、今ではスタッフなしで個人で参加しています。年齢も背景も異なる人と自然と話せることが、自分にとっては大きな自信になっています。

多様な社会的背景をもつ当事者が自ら学び、関わり合う ～スポーツ交流サロン大阪編～

関西でのスポーツ交流サロンは、「ダイバーシティカップ in 関西実行委員会」との共催で開かれました。ひきこもりや在日外国人、障害のある人の就労支援など毎回テーマを設定し、それぞれのテーマに関連する団体とも連携。多様な背景がある当事者自身が運営や企画にあたり、お互いの境遇を学ぶ機会となりました。2018 年度は 4 回開催し、延べ 130 人の参加がありました。

1.「ホームレス×サッカー」

2018年 9月 22日(土) @キャプテン翼スタジアム天王寺

ホームレスサッカーチーム「野武士ジャパン」メンバーの羽根寿夫さんと吉富卓爾さんの引率で、路上生活者や日雇い労働者が多く、支援施設なども集中する大阪市西成区の釜ヶ崎地域を街歩きしました。毎日炊き出しが行われている公園や野宿を余儀なくされている人が一時的に寝泊まりする「あいりんシェルター」などを訪問。実際に利用した経験者による解説を聞きながら、ホームレス問題とその支援のあり方について理解を深めました。

その後、釜ヶ崎からほど近い天王寺に移動し、サッカーを通じて交流。プレーが始まる前に、チームごとに街歩きの感想を共有すると「近くに住んでいるのに、知らないことばかりで驚いた」「いろいろな施設があり、もしかしたらひきこもっている人も活用できる場があるのではないか」という声も聞かれました。

2.「ひきこもり×サッカー」

2018年 11月 10日(土) @フットメッセ天下茶屋

この日は、ひきこもりの経験者やその支援者らが結成したサッカーチーム「hikimap チーム」が運営に全面協力。交流サロンの前半は対話形式のミーティングで、一人ひとりがサッカーを始めた動機などについて語り、Tさんは「運動は苦手だが、上達するのが嬉しいです。コミュニケーションも苦手ですが、サッカーで自然に人と交流できています」と話しました。

コートでのサッカー交流では、ランニングしながら当日の調子を表現するアイスブレイクなどのメニューで、参加しやすい雰囲気づくり。会社員の男性は「試合の前にお互いを知るプログラムが新鮮で楽しかったです。ひきこもりの人と一緒にプレーすることで人となりがわかりました」と感想を寄せてくれました。

3.「外国人×サッカー」

2019年 1月 13日(日) @フットメッセ生野

大阪市生野区で在日外国人のコミュニティづくりなどを行う「IKUNO サラダ・ボウルプロジェクト」の協力で開催しました。当日はインドネシア、ベトナム、中国、バングラデシュの出身者を含め、34 人が参加。チームに分かれての試合の前に、体を使った自己紹介や名前を覚えるパス練習などを行い、言語的なハードルをできるだけなくすよう工夫しました。終了後、インドネシア出身のアンディカさんは「多様な文化を持つ人同士が積極的にサッカーをしながら、楽しく交流できました。ワールドカップなどでも『サッカーを通じた平和』というメッセージがありますが、それに通ずるものを感じました」と思いを語ってくれました。

4.「就労移行×サッカー」

2019年 2月 9日(土) @フットメッセ天下茶屋

障害者の就労移行支援などを行う株式会社 LITALICO の協力のもと開催。大阪市内の事業所に通う利用者も参加し、サロンの前半では就労移行支援の取り組みについて学びました。また、「サッカーを通じて仲良くなる」というテーマで、グループに分かれて練習メニューを考えて発表。後半、コートに移動してからは、それぞれのメニューを実際に試し、ゲーム形式のサッカー交流をしました。参加者からは「久しぶりの運動で疲れましたが、気持ち良い疲労感でした。自分たちでメニューを考えて実際に行うというのも面白かったです」という声が聞かれました。

ダイバーシティカップ

「ダイバーシティカップ」は、ホームレス状態の人をはじめ、社会的に孤立しがちな人が一同に集い交流するサッカー大会です。「スポーツ交流サロン」が日常的な交流であるのに対し、ダイバーシティカップは年に１度の晴れ舞台です。

大会に向けての練習、普段とは異なるチームとの関わり、遠方からの参加など、多くの交流が生まれています。

2015 年に東京で始まったダイバーシティカップは、立ち上げ以降毎年開催され、2018 年 5 月には初の関西大会が開かれました。

ダイバーシティカップ5

東京

東京で5回目となったダイバーシティカップ。これまでの常連チームに加え、他チームからの紹介で参加した精神障害者のチームや過去の大会で知り合った人同士のミックスチームも参加し活気のある大会となりました。

●大会概要

日時　：2018年10月21日（日）10:00〜18：00
場所　：フットサルステージ（東京都多摩市）
主催　：特定非営利活動法人ビッグイシュー基金
共催　：ダイバーシティサッカー協会
協力　：社会福祉法人恩賜財団済生会支部東京都済生会
　　東京都済生会中央病院／新宿IGUAIS
参加者：10チーム200人

「文字通りダイバーシティな場で、居心地が良い。人目を気にせずにいられる場でした」

「ボールを追いかけていると余計な考えやストレスが消え、無心になれました」

「個人参加チームは最初コミュニケーションが少なくバラバラで勝てなかったのですが、お互いに話すようになるにつれ、結果的に勝てました。それがすごく心に残りました」

チャレンジリーグ

優勝　フェアスタートと愉快な仲間たち

社会的養護施設出身の若者で構成されたチーム

NIどうふ

東京都町田市・品川区で若者支援などを行う2団体で結成した混成チーム

FCグレイス・ロード

ギャンブル依存症からの回復施設の利用者チーム

FCさぽうと

日本で暮らす難民等、定住外国人の自立支援をする団体のチーム

まきばFC

宮城県のフリースクールに通う子ども・青少年によるチーム

東京大会プログラムの特徴と狙い

①チーム分け＋個人参加

大会に集まったチームには、日々練習をし「勝つ」ことを目指しているチームもあれば、運動は苦手だけど自分たちとは違った境遇の人と交流をしたいといったチームもあります。そこで、楽しみたいチーム向けの「エンジョイリーグ」と競技性の高いチーム向けの「チャレンジリーグ」にチームを分け、大会を開催。団体に所属しない当事者も参加できるよう「個人参加混成チーム」を１チームつくりました。

②ミックスゲームにボランティアも参加

ミックスゲームは既存のチームや参加者とボランティアの垣根を越え、誰もが参加できるように工夫。医療や受付などのボランティアも一緒にボールを追いかけました。

③ミックスチームのメンバーでテーマトーク

参加者がお互いの事を知る機会としてミックスチームのメンバーで下記のテーマトークを行いました。

「大会参加のきっかけ」「今日良かったところ」「これからチャレンジしたいこと」

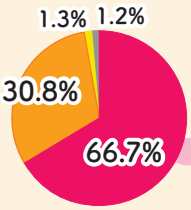
④大会の前後に交流会

※事後交流会の様子は22pを参照ください

参加者同士の交流がより深まるように、大会の前後に交流会を開催しました。

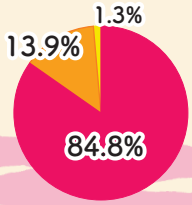
●数字で見るダイバーシティカップ5 in 東京

満足度



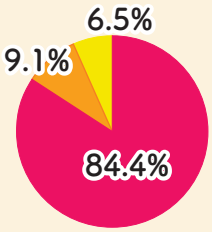
■とても満足
■満足
■やや満足
■不満足

また参加したいですか？



■ぜひ参加したい
■どちらともいえない
■参加したくない

心身のリフレッシュになりましたか？



■該当
■やや該当
■非該当

●参加者へのアンケートより

参加者数　200人
回答者数　80人

エンジョイリーグ

優勝　まちけん足猿部

谷中を中心とした医療プロジェクトチームと東京大学の公衆衛生教室の混合チーム

FYO

福島県で不登校の子どもや若者支援を行う団体の混成チーム

野武士と愉快な仲間たち in Tokyo

ホームレス当事者やボランティアによるチーム

個人参加混成チーム

元不登校やひきこもりの人などの混成チーム

レーヴェン勝田台

精神科通院中の人を対象とした障害福祉サービス事業所利用者によるチーム

初! 第1回ダイバーシティカップ

in 関西

2017年に東京で開かれたダイバーシティカップに参加した人から「関西でもダイバーシティカップを開きたい」と声が上がったことをきっかけに実行委員会を結成。初の関西大会が開かれました。

●大会概要

日時　：2018年5月12日（土）10:00〜17：00
場所　：フットメッセ天下茶屋（大阪市西成区）
主催　：特定非営利活動法人ビッグイシュー基金
共催　：ダイバーシティカップin関西実行委員会
　　ダイバーシティサッカー協会
協力　：一般社団法人daimon/特定非営利活動法人あそーと
　　アルテリーヴォ和歌山
参加者：12チーム150人

チャレンジリーグ

優勝 **ワンネスグループ**

アルコール・ギャンブル・薬物などの依存症から回復を目指すメンバーが中心で構成されたチーム

ICOLA

企業同士のコラボレーションを興す有志活動団体のチーム

大阪アジアンタール

大阪にあるデフサッカー（聴覚障害）チーム

NPO法人あっとすくーる

ひとり親家庭や、生活困窮世帯への学習支援を行う団体のチーム

インクルーシブフットボールクラブ Half Time

“誰でも・怪我なく・楽しく”をモットーに南大阪を中心に活動する、精神障害者と健常者によるチーム

滋賀ラクーンドッグス

滋賀県で精神障害のある人や社会的困難な状況にある人とサポーターが集まったチーム

関西大会プログラムの特徴と狙い

①チーム分け

東京大会と同様に、楽しみたいチーム向けの「エンジョイリーグ」と競技性の高いチーム向けの「チャレンジリーグ」の２つに分けてリーグ戦を開催しました。

②アイスブレイクやウォーキングサッカー

人とのコミュニケーションに不安を持つ人もいるため、体を使った自己紹介や鬼ごっこなどのアイスブレイクを取り入れました。また、運動能力が高い人や年齢も関係なく楽しめる、一切走ってはいけない「ウォーキングサッカー」にもチャレンジしました。

③ミックスゲーム

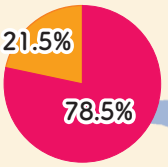
リーグ戦の後には、チームの垣根を越えて再編したチームによる「ミックスゲーム」で交流しました。自然と自己紹介やお互いのプレーをたたえ合う様子が見られました。

④ブースや屋台の出店

参加チームの紹介用にブースを設け、試合の合間に互いの活動を紹介しました。就労プログラムとしてカフェを開いている団体のサンドイッチやドリンクの出張販売など、プレー以外の形での参加も多くありました。

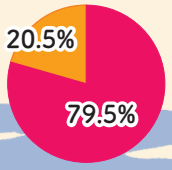
●数字でみるダイバーシティカップ in 関西

また参加したいですか



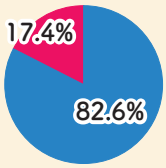
- ぜひ参加したい
- 機会があれば参加したい
- あまり参加したくない

ダイバーシティカップ満足度



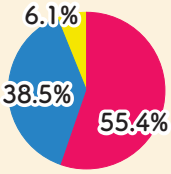
- 満足している
- やや満足している
- あまり満足していない
- 満足していない

性別



- 男性
- 女性

参加者の年代



- 10～20 代
- 30～40 代
- 50～60 代

●参加者へのアンケートより

参加者数　150人
回答者数　80人

エンジョイリーグ

優勝

LGBT&ALLY

LGBTのメンバーを中心に構成されたフットサルチーム

野武士ジャパンと愉快な仲間たちin Tokyo

東京のホームレス当事者やボランティアによるチーム

hikimapチーム

ひきこもり、若者支援機関の情報を利用者の目線でまとめるプロジェクトのメンバーによるチーム

100サル

京都市の地域活性化プロジェクトをきっかけに誕生したスポーツコミュニティ

野武士ジャパン大阪チーム

ホームレスサッカーチーム「野武士ジャパン」の大阪チーム

NPO法人 暮らしづくりネットワーク北芝

不登校やひきこもりなど生きづらさを抱えた若者とスタッフによる連合チーム

「勝つこと」と「楽しむこと」は共存できる。人と人をつなぐ「社会性スポーツ」の新たな試み

第1回ダイバーシティカップ in関西レポート

社会から孤立しがちな人にこそ求められるフットサル

午前 10 時前、ダイバーシティカップ in 関西の会場となった大阪市内のフットサル場には続々と参加チームが到着しました。コートでは思い思いにボールを蹴り始める参加者たちの姿が見られ、会場は大会前の高揚感に包まれました。子どもや女性の参加者も目立つため、その光景は、一見すると、よくある普通のフットサル大会。

しかし、この日、集まったのはホームレスやひきこもり経験者、LGBT、精神疾患、依存症、聴覚障害などの当事者と支援者たちといった一般にはフットサルとは無縁と思われがちな人たち。実に 12 チーム、約 150 人が参加する、まさに多様性豊かな大会となりました。

しかし、そもそもなぜフットサルなのでしょうか。ビッグイシュー基金は、ホームレスの自立支援を行う中で住居や仕事の提供だけではなく、本人の生きる意欲や人とのつながりをつくるスポーツ・文化活動を積極的に応援しています。そのひとつとして、ホームレスワールドカップへの参加を契機としたフットサル活動を 10 年以上続けてきましたが、今回、参加した団体の多くも同じように日常的にフットサルを行ってきた背景があるとのことです。

閉会式で子どもたちも大活躍！

例えば、ギャンブルや薬物、アルコールなど依存症からの回復を目指す「ワンネスグループ」は、集団で余暇活動を行う通常のプログラムに加え、月 1 回休みの日にフットサル活動を行ってきました。ギャンブル依存からの回復を目指している大塚悠貴さんは「これまでギャンブルや薬物などに依存してきた僕らにとって、休日や日々の空き時間をどう過ごすかというのは大きな課題。依存のせいで周囲との人間関係もほとんどなくなっているので、週末に予定を立ててサッカーなどのチームスポーツをすることはとても意味のあることです」と話しました。

また、精神障害者と健常者によるチーム「インクルーシブフットボールクラブ Half Time」は、偏見や差別のない生きやすい共生社会を目指して、障害のあるなしに関わらず誰もが参加できるフットサルクラブを運営しています。当事者の中にはフットサルを始めたことで気持ちが安定した人も多く、自殺を考えていた人が生きがいを取り戻した例もあるとのことです。代表の平山惣一さんは、数あるスポーツの中

でも特にフットサルのリハビリ効果が高いと話されました。「少人数の 5 ～ 6 人でコミュニケーションがとれて、しかも室内競技で雨天に左右されないので、心身に不安定さを抱えている人も継続的に参加しやすい良さがあります。それにクラブチームもたくさんあるので、今日のように年間を通して多くの参加機会もつくりやすい」

居場所としてのスポーツ

フットサルをはじめとするスポーツは、一般には日常の余暇活動にすぎません。しかし、参加者たちが語るフットサルは単なる余暇活動におさまらない意味のあるものであり、社会から孤立しがちな人たちにとっては、それこそが必要な居場所となることがあります。

大会中、20 人近くに話を聞きましたが、自らの障害や他の人には話したくないような過去も清々しげに語る姿が印象的でした。なかでも終始楽しげな表情で語ってくれた「LGBT & ALLY」の村木真紀さんは、ご自身にとってこの日は 30 年ぶりのリベンジだったと話します。「『キャプテン翼』が全盛だった小学生の時、サッカーがしたくて仕方なかったけど、当時はそんなことをしたら『おとこ女や』と言われる時代。スポーツは男女で分けることが多く、それがつらい当事者も多いけれど、こんな風に LGBT であることも当たり前に認められた状況でいろんな人とプレーできる場ならすごく楽しめるし、社会もそうであってほしいです」

大会は誰もが認め合い、楽しめる場でもありましたが、「hikimap プロジェクトチーム」の岳安一郎さんにとっては小さなチャレンジができる場であったようです。自身はいわゆる社会的ひきこもりで、不安障害になったこともあり、失敗や人間関係を避けがちでしたが、フットサルを通じて違う変化も感じているそうです。「フットサルがうまくなりたいとか、不安につながりそうな競争心や向上心はできるだけ持たないようにしていたのですが、失敗しても責められたり怒られないこういう場なら大丈夫な気がしてきていて、今日は負けたら悔しいという感覚を久しぶりに感じました。でも、大会前に立てたシュートを１本打つという目標は達成できたので、ゴールはできなかったけど、嬉しかったです」

スポーツは、勝敗の結果ばかりをみてしまいがちです。プレーの上手い、下手によっても優劣がつけられ、場合によっては疎外感を覚え、人を排除する方向に作用するのが従来の競技性スポーツが持つ拭いがたい特性です。大会の中でも、確かに敗戦を悔しがる声は多く聞かれていましたが、かといって「勝てないから面白くない」とはなりません。むしろスポーツを通じて人と人がつながり、それぞれの小さなチャレンジを無条件で認め合える場となることで、勝つことと楽しむことがうまく共存しているようでした。

文：稗田和博

事後交流会
～関係性を深めるために～

■日時：2018 年 11 月 23 日（金）11 時～ 15 時 30 分
■会場：フットサルステージ多摩／ E’s café
■参加者：36 人（5 チーム）

プログラム1

「ミックスチームでのサッカー交流」～ライバルとこれからを歩む仲間に～

「ダイバーシティカップ5」から１ヶ月後、大会に出場した５チームの参加者が再び集いました。大会ではライバルチームだった人ともミックスチームを組み交流。「実は、大会で敵チームだったときは彼の上手なプレーに敵対心をもっていました。でも味方になるとピンチを救ってもらえ、心強かったです。また一緒にボールを蹴りたいですね」といった感想が寄せられました。ダイバーシティカップでは大会の前後に交流や振り返りの場を設け、参加者の対話が進むようにしました。

プログラム 2

「からだの教室」～自分のからだと仲間に～

フットサル交流の後は、ヨガや３人グループになっての“からだ遊び”をしました。テーマは「自分を大切に扱う」と「自分の中の小さな小さな変化を感じる」。インストラクターはダイバーシティカップに参加したことがある大河原さん。参加者からは「身体がこわばっていたことに気がつきました。日常でも呼吸を意識し、自分をもっと大事にしたいと思います」といった感想や「フットサルの時とは違う表情が見られて面白かった。今度はみんなで踊ったり、歌ったり、スポーツ以外の交流もしてみたい」といった声がありました。

ヨガのリラックスポーズ

ダイバーシティサッカーのノウハウを伝える勉強会

2015 年に東京ではじまったダイバーシティカップは、2018 年に関西でも開催。さらには、他の地域でもダイバーシティサッカーのような大会や練習を開きたいといった話をいただくようになりました。

そこで今年度は、各地の支援団体がスポーツプログラムを展開できるようにするために、大会やコーチングについての勉強会（支援者講習会）を開催し、ダイバーシティサッカーでこれまで培ってきたノウハウを共有しました。

1.「勝利至上主義でないスポーツ」の可能性

サッカー（スポーツ）大会運営勉強会レポート　2018 年 8 月 25 日（土）

2. みんなが楽しめる場をつくるために

社会的困難を抱える人々へのスポーツコーチング勉強会レポート　2019 年 2 月 4 日（月）

1.「勝利至上主義でないスポーツ」の可能性

サッカー（スポーツ）大会運営勉強会レポート

左から糸数さん、中山さん、長谷川

プロスポーツにはないスポーツの可能性

2018 年 8 月、スポーツを通じた社会包摂※に取り組む3つの団体が集い、取り組みや活動ノウハウを広げるためのイベントが開かれました。今回の勉強会は、「サッカー大会を通じて“マイノリティ”と呼ばれる参加者の強みや弱みを出せる居場所を広げること」が趣旨でした。

登壇者は、「ダイバーシティカップ」をコーディネートするビッグイシュー基金の長谷川知広、宮城県で不登校やひきこもりの若者向けの大会「ＭＫＢカップ」を開催しているまきばフリースクールの中山崇志さん、沖縄のお母さんのためのフットサル大会「ダイモンカップ」の糸数温子さんの３名です。加えて一橋大学大学院教授で「スポーツを通じた社会的包摂」を研究している鈴木直文さんがモデレーターを務めました。

参加者は 40 名ほど。途上国でサッカー大会のボランティアをしている高校生やダイバーシティカップ参加者、視覚障害、精神障害、ひきこもりや不登校などの人々をサッカーを通じて支援している方や精神障害者サッカー日本代表選手など様々でした。

第１部では、長谷川、中山さん、糸数さんが、それぞれの取り組みと大会運営の中で大事にしていることについて意見を交わしました。

長谷川からはダイバーシティカップの狙いとして、「ホームレスやうつ病など参加者がその背景をこえ、サッカーを楽しみながら他者と出会う場をつくることで、互いの良さや違いを認め合い、自分らしく生きられる社会へつなげていきたい」といった話がされました。

中山さんからは「虐待やいじめを経験し『あきらめる』ことが身を守る術になっている若者に、サッカーを通じて、自分が仲間と努力をすれば目標を達成できることを経験し、“諦めない自分”に出会い、仲間と社会に生きていくための基礎を身に付けてほしい」といった話がされました。そして大会運営では“「参加できない」がない大会”を意識されているそうです。若者の中には当然スポーツが苦手な人、対人関係が苦手な人がいます。ただ、一つの大会を開くことで、料理が得意な人が芋煮を作ったり、仲間が頑張っている姿を見たりすることで人と出会い、やりたいことの幅が広がると言います。

糸数さんからは、「生活に困っている人のためのフットサル大会を開くので集まって下さい」では参加者も応援者も集まる人も限定的になるため、「日本一大きくて楽しい女子フットサル大会を開くので興味のある人集まって!」といった形で、広報や社会参加の形を増やしていくことの大切さについての話がありました。ダイモンカップでは、沖縄のメイン通りである国際通りを使ったストリートサッカー大会も開催し、同時にチャリティコーナーをつくり、「人々が単にサッカー大会を見に来た」で終わらない仕掛けをつくっているそうです。

※ 社会包摂とは、社会的マイノリティ（依存症や不登校、ひきこもり、ホームレス、精神障害者など孤立しやすい）の人々を含め、市民一人ひとりが互いに社会の一員として支え合える状態をつくること。

スポーツの可能性について熱く語る参加者たち

自分らしさを表現する遊びやスポーツ

第 2 部のグループトークでは、参加者の一人から次のような感想がありました。

「僕は入院をしたりしてサッカーができない時期もありました。そういった経験から、参加の形としてフットサルをプレーすることだけに限定しないことが大切だと思います。また、大会を楽しそうにみせる工夫も大事です。そのためには、大会運営をするスタッフも楽しむことが 1 番じゃないでしょうか」

最後に総括として、一橋大学教授の鈴木さんからまとめの言葉がありました。

「通常、サッカー大会は競技することが主な目的ですが、今回事例紹介のあった 3 つの大会は、プレー以外の多様な楽しみ方を設けることに力を入れている点が共通しています。試合ばかりではなく、時間や空間的な隙間が多く用意されていて、参加者がふらふらと各々のペースで遊べるように設えてあるのです。スポーツは本来、遊びの一形態なのですが、真面目になり過ぎて『遊び』の部分がなくなってしまいがちです。そうするとその場に居づらい人も出てきてしまいます。多様な遊び方が用意されていれば、スポーツの得意不得意や好き嫌いに関わらず、みんなが楽しめるようになります。実はこれは社会全体にも当てはまることだと思うのです。社会のなかでもっと多様な遊びが許されれば、みんながもっと豊かに暮らせるようになる。なぜなら遊ぶって、自分らしさを表現することだからです。スポーツの場に遊びの余地を作ることをきっかけに、社会のなかでも遊べる余地があらゆる人に担保されるようになっていってほしい。そうすると、社会の固定化された価値観が揺さぶられて、みんなが安心して自分らしく居られる場になっていくのではないかと思っています」

文：石井綾子

皆の意見を絵でまとめています

2．みんなが楽しめる場をつくるために
社会的困難を抱える人々へのスポーツコーチング勉強会レポート

2008 年に東京と大阪で発足したホームレスサッカーチーム「野武士ジャパン」。いまではホームレス状態の人に限らず、ひきこもりやうつ病といった様々な背景を持つ人たちも参加しています。年齢も参加の目的も異なる人たちが楽しめる場をつくるには何が大切なのでしょうか。「野武士ジャパン」（以下、野武士）のコーチングにかかわってきたメンバーの経験を共有し、社会的困難を抱える人々へのコーチングについて考える勉強会が開催されました。

左から中田さん、瀬川さん、鈴木さん

「勝ち負け」からコミュニケーションへ

第一部では「野武士ジャパンのコーチング実践」として、東京野武士コーチの中田彩仁さんと瀬川紘人さんがコーチングの工夫や意図を紹介しました。モデレーターを一橋大学教授の鈴木直文さん、ビッグイシュー基金の長谷川が務めました。

野武士が発足した当時はホームレス状態の男性メンバーが中心でした。ホームレスワールドカップ出場などもあり、練習の雰囲気はいまとずいぶん違っていたといいます。「大会に勝つことが目的で、コーチはメンバーの社会復帰を意識して、スポーツの上達だけでなく選手の言葉遣いなども厳しく指導していました。ただ、厳しい指導についていけないメンバーもいました」と長谷川は話します。

ホームレスワールドカップ以後、試合に勝ちたい気持ちだけでなく、チームをコミュニティとしてとらえ、仲間に会うのを楽しみにしているメンバーもいることに気づき、次第に野武士のコーチングは誰もが楽しめるような場づくりを意識したものへと舵を切っていきました。

「最初は、なぜもっと厳しい練習や指導をしないのかと感じた」と当時の事を瀬川さんは振り返ります。しかし、参加者と会話を重ねるなかで、ホームレスの人の中にはコミュニケーションが苦手な人や障害のある人もいることに気づき、誰もが安心して楽しめる場を心掛けるようになったと話します。

中田さんは、①安心できる場であること　②少し頭を使うメニュー　③個人の責任ではなく連帯責任になるメニュー　を意識しているといいます。「連帯責任」と言ってもミスを誰かひとりの責任にはせず、笑える雰囲気をつくることが大事だと言葉を添えます。

野武士ジャパンの経験からダイバーシティカップでは、対人恐怖を持つ人も安心して場に入れるようアイスブレイクや自己紹介を取り入れるようにしています。足ではなく手を使って行う簡単なメニューも多く、高齢者や運動の苦手な人でも参加しやすい工夫がされていて、参加者同士の関係性づくりやコミュニケーションの要素を重視していることが伝わってきました。

高校サッカーとの共通点と差異

第二部では、豊島学院高校サッカー部顧問の早川幸治さんが登壇し、野武士ジャパンと高校サッカーでのコーチングの共通点や差異を探りました。

私立学校の教諭である早川さんの専門は体育。普段は70名が所属する高校サッカー部の顧問を務めています。部活の指導にあたって生徒には「サッカー部は競技としてサッカーをする場であり、ただ単に楽しい場ではない。スポーツを通じて人間的な成長を求めているので勝ち負けにはこだわっている」と伝えているそうです。

高校生へのコーチングで大事にしていることは　①自分自身に対して、厳しくなれるよう選手を導くこと　②ミスをする権利を与えること　③「良い指導者とは、どのような指導者だろう」と常に考え続けること。「チャレンジを否定しない」点は、野武士も高校サッカーも共通していますが、ミスの原因を突き詰める厳しさ、あえて試練と向かい合わせる点が異なると早川さんは感じています。

参加者からは「部活の場合はミスから学ぶという機会をつくる一方で、野武士やダイバーシティカップの参加者の場合は、ミスをすることに対して警戒心が強い人が多く、まずは自分がここにいていいという感覚を育てることが大事。チャレンジや失敗を否定しない点は共通するが、失敗へのアプローチは逆方向だと思いました」という感想もあがりました。

質疑応答のあと一橋大学の鈴木さんがまとめを発表。「チャレンジとスキル（今の能力）のバランスが取れていると無我夢中で楽しめます。難しすぎると不安になるし、簡単すぎると退屈。できそうでできないバランスで課題が組まれていると楽しいです。これはスポーツのコーチングに限った話ではありません」

最後は「みんなが等しく楽しめるスポーツの場をつくるためのコーチングのフィロソフィーをつくろう」をテーマに、テーブルごとでディスカッションしました。「目指すのは成功体験」「プレイヤーやコーチ以外の役割も提示していく」など様々な意見が出され、「解はないが、良い指導者とは何かを考え続けることが大事」という思いを共有して、勉強会は終了しました。

文：中村未絵

ダイバーシティサッカー協会活動一覧

2018年 4月～2019年 3月

4

4/7(土)28(土)
スポーツ交流サロン（東京）

4/10（火）11（水）
ホームレスワールドカップアジア会議

4/24(火)
第1回 協会運営委員会

5

5/12(土)
第1回ダイバーシティカップ in 関西

5/26(土)
スポーツ交流サロン（東京）／サッカーボールアート展に向けた作品作り

5/13(日)
第2回 協会運営委員会

6

6/9(土)
ダイバーシティカップ in 関西 事後交流会(1)

6/5（火）～28（木）
西武池袋本店サッカーボールアート展

6/9(土)23(土)
スポーツ交流サロン（東京）

6/16(土)
第3回 協会運営委員会

7

7/14(土)
ダイバーシティカップ in 関西 事後交流会(2)／スポーツ交流サロン（東京）

8

8/25(土)第1回勉強会（支援者講習会）
サッカー（スポーツ）大会運営勉強会

8/11(土)25(土)
スポーツ交流サロン（東京）

8/16(木)
第4回 協会運営委員会

9

9/22(土)
ダイバーシティカップ5事前交流会(東京)

9/8(土)
第5回 協会運営委員会
スポーツ交流サロン（東京）

9/22(土)
スポーツ交流サロン（大阪）

10

10/21(日)
ダイバーシティカップ5(東京)

10/13(土)27(土)
スポーツ交流サロン（東京）

11

11/23(金)
ダイバーシティカップ5　事後交流会(東京)

11/10(土)
スポーツ交流サロン（東京／大阪）

12

12/22(土)第2回勉強会（支援者講習会）
「スポーツのもつ、小さいけれどたしかな力」体験型交流学習会

12/8(土)
スポーツ交流サロン（東京）

12/5(水)～7日(金)
ソーシャルスポーツコーチ講習体験会

1

1/5(土)
第6回 協会運営委員会

1/12(土)26(土)
スポーツ交流サロン（東京）

1/13(日)
スポーツ交流サロン（大阪）

2

2/4(月)第3回勉強会（支援者講習会）
社会的困難を抱える人々への
スポーツコーチング勉強会

2/2（土）第7回 協会運営委員会
2/9（土）スポーツ交流サロン（大阪）
2/23(土)スポーツ交流サロン（東京）

2/14日(木)～16日(土)
オランダ視察

3

3/16(土) 第4回勉強会（支援者講習会）
オランダに学ぶ社会性スポーツの展開

3/16(土)
第8回 協会運営委員会

Pick Up

アジアのホームレスサッカー関係者が日本に集合

ホームレスワールドカップに参加するアジアのパートナー団体（インド・インドネシア・韓国・日本・香港）の代表者が集まり、各国のホームレス問題やアジア大会に向けて議論をしました。会議には日本サッカー協会会長の田嶋幸三さんも参加し「日本では統計上のホームレスの方の数は少ないですが、様々な要因で社会的な不利を被る方は多くて、彼らはこの数には含まれていません。こうした問題に対してスポーツの力を用いて国内や海外で解決しようとする皆さんの努力に感謝します」とコメントされました。

アジア代表が集合

ダイバーシティサッカーと西武百貨店がコラボ

西武百貨店で開かれたサッカーボールアート展（プロデューサー：日比野克彦氏／アーティスト）に、ホームレス、ひきこもり、うつ病の背景をもつメンバーが制作した作品が展示されました。サッカーのプレーは苦手な人もボールペイントでは力を発揮し、個性的な作品を創る姿が見られました。

ボールを懸命に描く野武士メンバー

オランダに学ぶ、“社会性スポーツ”の展開

2018 年 12 月、ホームレスワールドカップに参加するオランダのパートナー団体「ライフ・ゴールズ・ファウンデーション」のスタッフが来日。依存症やホームレス状態の人、シングルマザーなどに対してスポーツを通じて働きかける「ソーシャルスポーツコーチ」というプログラムの講習体験会が大阪で開かれました。2019 年 2 月にはオランダを視察し具体的なプログラムを見学。現地の参加者やコーチの話も聞き、日本への導入について検討しました。

オランダのスタッフにヒアリング

おわりに

「強さ」だけでなく「弱さ」も自分で認める

いつの時代にもその時代を象徴する言葉があります。ここ数年、使用されるようになった言葉の代表が「ダイバーシティ」、「インクルージョン」ではないでしょうか。「ダイバーシティ」というカタカナの文字自体は、漢字のように意味や形を表すことはできません。最近のソーシャルセクターでは、カタカナ語が多く使用されています。では、多様性、包摂といった日本語に置き換えればよいのでしょうか。しっくりくるような感覚もありますが、個人的には腑に落ちません。むしろ、言葉がもつ本来の深く幅広い概念から切り離され、使い手の都合の良いように『コトバ』が使用される場面が多いように感じます。

私たちの活動はホームレスサッカー時代を経て、ダイバーシティサッカーへと変化してきました。私自身、たくさんの方々との繋がりができ、みなさんと共有できる経験が増えました。さらに、私の子ども達も大きくなり、練習や大会に参加しボールを蹴ったり、追いかけっこをしている様子を見られるようになり、良い場だなと主催者の立場を忘れて感動することが多くありました。この報告書にもたくさんの笑顔があります。ただ、「ダイバーシティサッカーって何だろう」、「我々の活動は何を目指しているのか」という問いについては明確な解が出せず、道半ばにいるというのが正直なところです。

ですが、試行錯誤の中で次のようなことを大切にしたいと思うようになりました。それは、日本社会で是とされてきた考え方や価値観、慣習や前例とは少し異なります。『雨にも負けず、風にも負けず』ではなく『雨にも負けて、風にも負けて』、『歩くだけでなく休む』、『強さだけでなく弱さも自分で認める』、それが『独りではなく仲間につながる』、『競争だけでなく協創』を、『優劣ではなく…』といったような視点です。

立派な冊子を作っているように見せていますが、ダイバーシティサッカーの実態は脆弱です。しかし、ダイバーシティサッカーの参加者が教えてくれたことがあります。それは、ダイバーシティサッカーも完璧なものである必要はないということです。課題がありその弱さを認め、多くの人の協力を得ながらこれからも試行錯誤していくことが、これからの社会を創ることになるのではないでしょうか。肩の力を抜いて自然体で、皆さんと進んでいけたらと思います。

ダイバーシティサッカー協会委員会
委員長　**蛭間芳樹**

これまでの冊子一覧

社会（スポーツ）を
あそぶガイドブック
ーサッカーが作る
居心地の良い社会ー

2018 年 3 月

2017 年度
ダイバーシティ
サッカー活動報告書

2018 年 3 月

第 2 回ダイバーシティ
カップ報告書
ー 1 つのボールが
人生を変えるー

2016 年 11 月

ダイバーシティカップ
報告書
ーボールがつなぐ
社会と人間の多様性ー

2015 年 8 月

※ ご希望の方には無料でお送りします。（送料のみ着払いでご負担をお願いします）
お名前・ご住所・冊数などをビッグイシュー基金の HP の入力フォーム、または FAX でお知らせください。

2018 年度ダイバーシティサッカー活動報告書
2019 年 3 月 15 日

編集・発行：特定非営利活動法人ビッグイシュー基金
協力　：ダイバーシティサッカー協会／ダイバーシティカップ in 関西実行委員会
デザイン　：株式会社創造集団 440Hz
写真　：一般社団法人京都ジェンヌの会ー写真部（第 1 回ダイバーシティカップ in 関西）
事務局　：長谷川知広　古川智朗　大川恵里香　吉武華子　永井悠大　保井力　佐野ハナ
川上翔　高野太一　粟原奈津子

ダイバーシティサッカー協会委員会
蛭間芳樹（委員長／野武士ジャパンコーチ）
青木弘達（株式会社リヴァ取締役）
井上英之（慶應義塾大学大学院特別招聘准教授）
鈴木直文（一橋大学大学院教授）
日比野克彦（アーティスト、日本サッカー協会社会貢献委員会委員長）
星野智幸（作家）
油井和徳（NPO 法人山友会理事）

特定非営利活動法人ビッグイシュー基金（連絡先）
〒 530-0003　大阪市北区堂島 2 丁目 3-2 堂北ビル 4F
TEL　：06-6345-1517
FAX　：06-6457-1358
HP　：https://bigissue.or.jp/
MAIL：info@bigissue.or.jp

平成 30 年度　独立行政法人福祉医療機構　社会福祉振興助成事業
社会的困難な若者へのスポーツ応援展開事業

diversity soccer